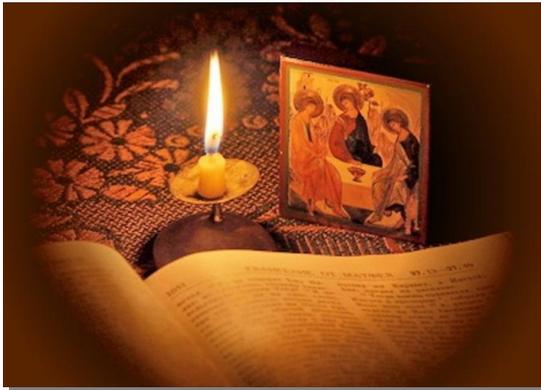


教会学校だより

# ま たね 播かれた種

*The Eastern Diocese of the Orthodox Church in Japan*



## 齋について

私たちは日曜日に教会へ行ってご聖体に与かりますが、正教会では、領聖(ご聖体をいただくこと)の前には齋をするよう定めています。このルールは、地域によっては「前日の夜に肉を食べない」または「領聖の三日前から齋する」というものもありますが、どこでも共通して言われていることは、前日の夜12時以降(つまり日付が変わり聖体礼儀の行われる日)は領聖まで禁食する(水を含め何も口にしない)ということです。

ただし、齋はあくまで「我等の肉体を鎮むるが為に制定」(アレキサンドリヤ主教至聖なるティモフェイの規定的答第八問/聖規則書 p.410)されたものであり、「肉体にて鎮静し衰弱する時は其の欲する處に従ひ自ら堪ふる丈け飲食物を受くべし」(同)とあるように、闇雲に守ることが大切なのではなく、バランスが重要です。ですから、領聖前とは言え、薬を飲まなければならないなどの理由から、水を飲まなければならない、少し食べなければならないというときは、無理をせず、司祭に相談しましょう。

ちなみに、子供の齋・痛悔は、10歳が一つの目安となります。聖ティモフェイは、「人は幾歳より其罪神に審鞠せらるるか」との問いに対し、「各人の知覚及び判断力の程度に依る或者は十歳より審鞠せられ又或者は其後よりす」と答えています(同第十八問/p.414)。つまり個人差はありますが、大体10歳頃からは痛悔機密を受けられるよう教育すべきですし、またそれに伴って齋を習慣付けることはとても大切なことです。

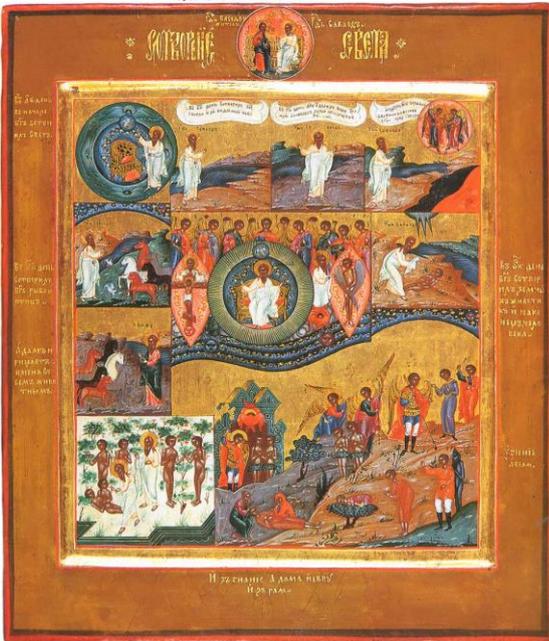
齋に関して、サロフの聖セラフィムは次のように述べたと伝えられています。ある時、聖セラフィムの許へ一人の母親がやってきて、娘に最良の結婚をさせるにはどうすれば良いか助言を求めたところ、聖セラフィムはこのように答えました。「何よりもまず、あなたの娘が生涯の伴侶に選んだ人が、齋を守るか確認しなさい。もし彼が齋しないなら、たとえ彼自身が自分をどう捉えようと、彼はハリストティアニ(クリスチャン)ではありません。」

齋をしなかったところで、この世的には何の損失もありません。それどころか、肉欲を満たせないという意味では、齋こそが損のように思われるかもしれません。しかし、信仰は神さまからの呼び掛けへの自由な応答であって、齋はその人が教会を信じ、神さまとの体合を目指して生きているかの秤となるのです。

降誕祭を迎えるに当たり、少しでも良い準備ができますように。(司祭ルカ田畑隆平)



# この世のはかりごと — 摂理



天地創造 (19世紀/サンクトペテルブルグ)

私たちは間もなく降誕祭を迎えます。人々の救いのためにこの世に降り、人となり、福音を宣べ伝えて人の真の救いの道を明らかにされたハリストスの降誕の出来事も含め、神様のあらゆるはかりごとは摂理と呼ばれます。私たち正教徒は天地を創り、摂理し、啓示する神様を信じる者です。

一方で、多くの人々は専ら自分の日常の茶飯事に心を奪われ、自分中心の欲を追い求めながら生活しています。他人よりも自分という激しい競争の中で、本来の人の在り方を見失い、心も疲弊しているようです。

確かに世の中の技術的進歩は目を見張るものがあります。私たちもそのような環境の中で生活も随分向上し、精神すらきつと高度に成長してきたと思っているのかも知れません。しかし実のところ、私たちの心や精神の問題は古代人のそれと大

差ありません。むしろ古代人は今より身の程を良く知っていて、自然と共存し穏やかな生活を営んでいたのではないのでしょうか。人はいつの間にか自分の力でこの世の中心的存在となったと錯覚し、この世の頂点から見下ろす支配者のように振る舞い始めてしまいました。

聖人はこのような人々のおごりに対して警鐘を鳴らしています。オプチナの克肖者聖ニコンは「われわれの生活・生涯が定められるのは、自分勝手な思いによってではなく、神の摂理によってである」、心の平和は自らの意志を捨てること、自らに都合の良い完全な条件など存在しないと述べました。聖イグナティ・ブランチャニーノフは「傲慢な人は、自分を神の被造物ではなく、自主的な存在と見なす。彼にとって地上の生涯は終りのないものに見え、死と永遠は存在しないかのようであり、人間の知恵が世界を支配していると彼は思っている。彼は全生涯を地に捧げ、絶えず地上に罪を楽しむ生活を送りたいと思っている」、しかしそれは無知で実現不可能な目的なのだとはっきりと指摘しています。

この世のはかりごとは神の愛から始まりました。この愛は私たちの理解を遥かに超えるものです。この世のあらゆる出来事は決して偶然の産物ではありません。私たちは全ての中にその啓示を見出すことが可能なのです。

正教の信仰はこのようにして神の摂理に気づき、おごりを捨て遜りを学び、人を深く愛し豊かな生命と喜びに満ちて生きるように私たちを導き、霊的な成長と変容を遂げさせていくのです。



オプチナの聖ニコン



聖イグナティ・  
ブランチャニーノフ

司祭 クリメント 児玉慎一

## 荒れた海を見下ろして

金成ハリストス正教会 イオアキム 後藤昌男

エレナ酒井ゑいさんは、刈敷・後藤家の6代目イオシフ後藤玄栄の先妻の子で、イオアン酒井篤礼神父の妻として函館と刈敷（現・宮城県栗原市）の間を幾度となく行き来したことは「ニコライ堂の女性たち」に詳しいところです。私たちは玄栄の後妻マリヤさんに連なる者ですが、彼女等が想いを交わしながら刈敷でも共に祈っただろうことに想いを馳せ、伝えられてきた信仰の恵みに感謝するのです。今回、函館聖堂再建100年の祝賀会への参加は、私たちの正教会信仰を再確認することであり、加えて函館の地でゑいさんの情熱の一端を見つけるためでもありました。

聖体礼儀では、ゑいさんもこの聖堂に立っていたことに想いを巡らせ、イコンを仰ぎ見て『主憐れめよ』とイイススに祈るひとときとなりました。函館の信徒会館には、ゑいさんの埋葬式の様子を伝える写真があり、聖堂を囲むように溢れるばかりの人々で埋め尽くされたその光景に、彼女がどのような人物だったのかをうかがい知ることができました。

そして、今回はゑいさんの墓参が密かなる目的でしたが、さまざまな偶然も重なり、お忙しいにも関わらず、小池神父の計らいでゑいさんの墓前に立てたことは感激の一言でした。さらに神父に祈祷していただき『永遠の記憶』を繰り返しました。

海に面した斜面の一番奥、ゑいさんの墓石は海に向かって建ち、その左右に萩原家の人々が眠られておりました。折しも蝦夷梅雨で荒れた海を見下ろしながら、こんな海峡を幾度も行き来したのかと嘆息し、自分は一体なにをやっているのだろうと心が小さくなりました。しかし、ゑいさんと同じ聖名の娘の後ろ姿を見て、信仰は間違いなく地道に受け継がれていくのだと感じました。

文明の利器は25分で海峡を越えますが、ゑいさんは順境の日も逆境の日も黙々と歩き続けたのでしょう。そして信仰の道もそのようであったと思います。私たちは復活の日にゑいさんに会うことを楽しみにしながら『畏るべき審判において宜しきこたえをなすを賜わんことを求む』とこれからも祈り続けるでしょう。

（一関教会会報「Link」2016年8月号より転載致しました）

後藤ゑいは1848年宮城県に生まれ、同郷出身の医師、酒井篤礼と結婚、3人の娘をもうけました。篤礼は、まだキリスト教が禁制であった1867年に洗礼を受け日本で最初の正教徒となり、ゑいも翌1868年（明治初年）に受洗、日本で最初の女性信徒となりました。篤礼は後に司祭となり盛岡に赴任、ゑいは函館教会で洗濯婦として働き、離れて暮らしていましたが、1882年に篤礼神父が急死。篤礼の死後、ゑいは函館教会の敷地内にあった私立小学校「正教学校」で裁縫教師として教え、1884年に「裁縫女学校」（後の正教女学校）を創立、校長として働きました。自分の全てを教会に捧げたゑいは「露館のおっかさん」と敬愛され、彼女の許には大勢の人が相談に訪れたそうです。

1926年（大正15年）8月8日、満79歳でゑいは永眠します。その葬儀で三女・信の夫、イオアン小野帰一神父（後のニコライ小野主教）は次のように説教しました。

「尊母（ゑい）よ、私はあなたの病床の側におりまして一々ご訪問の方々に接しました。そして、皆様が口を揃へて尊母を幸福な人だと申しておるのを聞きました。…尊母の全生涯は不幸といふ不幸を重ね、禍といふ禍に遭ひ、艱難といふ艱難を忍び、窮乏といふ窮乏を味ひながら臨終まで導かれて来たのであります。さらば、尊母の生涯はどこに幸福の点がありましたか。何事が尊母を幸福な人だと言はしめるのでせうか。…尊母が最後において羨望の的となりました幸福は、…すなはち、如何なる場合でも、『その心を主の法に置き、日夜この法を思念』（聖詠1:2）だからであります。…『善き戦を戦ひ、馳すべきほどを尽くし、信を守り』（ティモフェイ4:7）て、動もすれば動揺しやすい我々に、大に則るべき好模範を示されました。…」恐らく、エレナ酒井ゑい姉の生涯は、「いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝する」ものだったのでしょう。そして、私たちもそのような「幸福」を生きていくことが出来たとき、初めて人に正教を伝えられるのだと思います。

# キャンプだホイ！ in 上武佐



7月26～28日の3日間、上武佐ハリストス正教会生神女就寝会堂を会場に行われました。地元上武佐教会の参加者を含めると約40名が参加。男性は現在居住者のいない司祭館、女性はかつて地域の保育所であった上武佐集会所に宿泊。夕食は教会堂前庭でバーベキュー。霧雨のような天候だったが、翌日はさらに良くない予報だったので、キャンプファイヤーと花火も一日目の夜に行った。

二日目、朝の祈祷。天気が悪く、朝食後はバスで裏摩周に移動するも霧しか見えない状態。しかしオホーツク沿岸は快晴で、網走監獄見学では広い敷地内をゆっくり見て廻ることが出来た。道の駅流水街道網走にて昼食。知床に移動途中、斜里正教会に立ち寄り。汗ばむほどの陽気のなかをオシンコシンの滝の水しぶきで涼み、さらに知床峠に向かう。しかしウトロを過ぎてしばらく行くと天候が悪くなり、霧で何も見えない状態に。残念ながら知床峠はバスに乗ったまま通過、中標津に戻った。

中標津保養所温泉の後、夕食前に夜の祈祷。カレーライスを頂いた後は室内にて聖書カルタ大会をニコライ神父に解説していただきながら楽しんだ。

三日目、最終日も教会堂での祈祷で始まる。朝食後、子供たちは感想文書き。白いうちわにそれぞれの思いや絵を書き込んで完成。

みんなの力で18回目のキャンプだホイを無事に開催することができた。特に上武佐教会の皆さんはずいぶん前からさまざまな手配をし、施設の清掃をしておいてくれた。婦人会の方々には食事関係を一切お世話になった。また、今回は宿泊施設として上武佐集会所をお借りできたことは大きかった。前回の上武佐キャンプ時は狭い場所に大勢寝泊りしたので「騒がしくてなかなか眠れなかった」という声があったことから地域の方に相談してみたところ「ハリストス教会さんなら」と快く貸してもらえることになった。それは100年前の武佐開拓時代から地域の拠り所であり、農繁期の保育所として教会を使っていたことなど地域に貢献してきた先代方のおかげである。

楽しかった今夏のハリス村もお開きとなった。来年は道央・深川（ネイパル深川）での開催となる。道央は交通の便が良いので、道東・道南からはもちろん、道外からも多くの参加があると良いと思う。さらに再来年はキャンプだホイが記念すべき20回目を迎える。始まった頃に比べると参加者は減っているものの、キャンプに参加したことで教会への親しみを感じて洗礼に至った例も多い。もう少し経つとキャンプだホイで育った子供たちが親になり、その子供たちを連れて参加するようになるだろう。

# 教会学校宿泊研修会 in 遠野

7月27日(水)・28日(木)の2日間に亘り「東北ブロック教会学校宿泊研修会」が遠野教会にて行われ、大人19名、子供4名が参加しました。両日とも曇り時々雨という生憎のお天気でしたが、天候にはほぼ左右されずに、2日間を過ごすことができました。

## [1日目]

午後1時半、遠野教会に集合して開会祈祷とオリエンテーションの後、管轄のダヴィド水口神父より短い講話がありました。講話は遠野教会が「聖太祖アウラアム・サツラ会堂」であることにちなみ、アウラアムとサツラについて、三人の天使への饗応(フィロクセニア)について、至聖三者についてなどで、実際にイコンを見ながら学びました。

講話の後は、現役のバス運転手である遠野教会のワシリー荒川篤志兄の運転するバスで「遠野伝承園」へ移動。国の重要文化財である1750年頃建立の間り家(母屋と厩舎がL字形に一体化した家屋)の見学と、囲炉裏を囲んでの語り部による昔話を聞きました。

伝承園を見学した後は、歩いてカッパ淵へ移動し、子供たちは河童釣りに挑戦。竹竿に胡瓜をつけて河童の捕獲に挑みました。残念ながら河童を捕まえることは出来ませんでした。胡瓜だけはしっかり無くなりましたので、きっと河童はいるのでしょう。

河童釣りの後は、宿泊地である「水光園」へ移動し、水口神父による「日本正教会の聖堂・会堂巡り」と「魚の名前のビンゴゲーム」。「聖堂巡り」では、北から順に聖堂・会堂がスクリーンに写し出され、バーチャルな巡礼の旅をしました。ビンゴゲームでは難問が続き苦戦しましたが、何とか全員が景品のイコンを貰うことが出来ました。

ゲームの後は、いよいよ夕食です。メニューは遠野名物のバケツジンギスカンでした。食後に花火を楽しんだ後は、入浴、就寝前の祈祷をして子供たちは就寝。大人たちは夜遅くまで語り合いました。

## [2日目]

2日目の朝はラジオ体操から始まりました。生憎の雨のため会議室に集まったものの、ラジオでは電波を拾えず危うく中止かと思われましたが、スマホで無事に第二まで行うことが出来ました。続いて朝の祈祷。参加者全員で祝文を輪誦しました。

朝食を食べた後はバスで「馬の里」へ。先程までの大雨が嘘のように雨は上がり、馬の芸を見たり、乗馬をしたり、厩舎を見学したりと、盛りだくさんの一時間でした。

続いて向かった「遠野ふるさと村」は、江戸時代中期から明治時代中期頃までの遠野を再現した施設で、まるで200年前にタイムスリップしたかのようでした。また、「ふるさと村」ではグループに分かれて草木染めや陶器作り、木製キーホルダー作りなどを体験。昼食もこちらの曲り家で、岩手の郷土料理である「ひつつみ」などをいただきました。そして、教会へ戻り、閉会祈祷をして2016年の宿泊研修会の全工程を終えました。



# 教会学校ニュース

## ■ 釧路管轄

教会堂の無い帯広で年に1回、近隣センターを利用して聖体礼儀を行っています。集会室に組立式の宝座を持ち込み、至聖所を設けます。聖所との間にイコノスタシスがありませんので、子供たちからも至聖所で何が行われているかよく見ることができます。



教会学校の教材に、聖体礼儀などに

用いる聖器物のイラストがありました。子供たちは奉献台の前までやってきて、普段は見る機会の少ない聖爵などをじっくりと観察し、教材に色を塗ったり装飾を書き込んだりしていました。



## ■ 札幌管轄

今年も教会の畑でたくさんの野菜(トマト、キュウリ、人参、いも)、果物(スイカ、メロン)を収穫することができました。三歳から小学生の子供たちが喜んで野菜の生長を楽しみながら、新鮮な大地の恵みを口にする時の笑顔は周りの人たちを幸せにしてくれます。恒例のスイカ割りも太刀の扱いにも馴れて、目隠しをされながらも見事に割るようになりました。割ったスイカは皆でおいしく食べました。



8月14日は「はぎの会」敬老の日の出席者の皆さんにプレゼントする「ポストカード」を作りました。秋をイメージして「月とうさぎとすすき」の切り絵を貼り、自分たちのおじいちゃんおばあちゃんのことを思い、言葉を添えてくれました。皆さんにはとても好評で、自分の孫と思いかardを大切にしますという声がかえってきました。



## ■一関管轄

一関管轄で主日に教会学校に来るのは金成正教会の一人で、マトシカときには母親と一緒に参加することもあります。教会の暦に合わせた祭日の説明をしてから始まりますが、大概の工作作りは時間切れで家に持ち帰って完成するようで、完成した作品の写真が送られてきます。降誕祭はクッキー作りでオーブンを持ち込む予定で準備しています。子供の姿が急に少なくなったのはこの6、7年かと思います。総じて少子化という言葉で括ってしまうが、私たち教役者の熱が足りないと猛省しています。知恵と力を合わせて突破口を作り、まずは倦まずに粘り強く働くことにしてゆきたいものです。



## ■仙台管轄



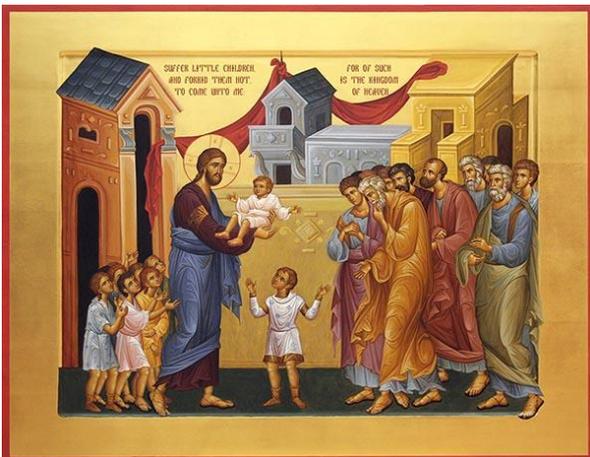
〈七五三モレーベン〉

11月6日（日）の主日聖体礼儀に引き続き、子供たちの健やかな成長を感謝し願う、七五三のモレーベンが月例の聖名感謝祈祷と併せて行われました。教会学校では降誕祭祝賀会での発表に向けて準備を始めています。今年は紙芝居と人形劇に挑戦する予定です。



〈敬老会〉

9月4日（日）には敬老会が開催されました。祝賀会では子供たちのパフォーマンスに皆拍手喝さい。マトロナ土田みつちゃんのバレエ、ビクトル土田貴一郎君のバイオリンに聞き入りました。



時に幼児をイイススに攜へ來りて、彼等に其手を按せて、禱らんことを求むる者ありしに、門徒之を戒めたり。然れどもイイスス曰へり、幼児を容して、我に就くを禁ずる毋れ、蓋天國は是くの如き者に属す。乃彼等に手を按せて、彼處を去れり。

（マトフェイ福音第19章13節-15節）



# しつもんばこ



Q. 「来世の生命」とはどういうことですか？ 人は死ぬと天国か地獄に行くのですか？ 神様は地獄を無くすることはできないのですか？

A. 聖体礼儀中「信経」において、私たちは「我望む、死者の復活、ならびに来世の生命を。」と唱えます。この「来世の生命」とは、これまでに亡くなった人が霊の状態ですごどこかに存在しているということを示しているのではなく、ハリストスの再臨後、全ての死者の肉体と霊が再び結びついて復活し、ハリストスによる公審判を経て入る「天国」での生命のことを指しています。

聖書は、ハリストスの再臨と全死者の復活および公審判があることをはっきりと述べています。いつそれが起こるのか知ることはできませんが、その時は主なる神であることが明らかな姿で(光栄を顕して)ハリストスが再びやってきます。

一方、再臨前の死者たちの状態について聖書はそれほど語っていません。が、イイススは自分と並んで十字架にかけられた盗賊に「爾今日我と偕に樂園に在らん」(ルカ伝 23 章)と告げ、また例え話(同 16 章)では金持ちが地獄の炎の中で苦しみ、貧しいラザリがアヴラアムの懷で宴席に就いていると教えました。また、聖人たちは神様の傍に居られ、私たちの為に祈り続けていることを正教会は確信しています。

すなわち、人間は死によって肉体と霊に分かれ、肉体は墓に納められる。霊は目には見えないが存在し続ける。その状態は様々で、ある霊は安らぎ、ある霊は苦しんでいる。その状態を天国や地獄と表現することはあるが、それらはハリストスの再臨までの一時的な状態のことであって、永遠の生命あるいは永遠の地獄に定められるのは復活して公審判を経てからということになります。

なぜ霊は再臨の時まで一時的な状態に置かれ、すぐに天国なり地獄なりに決定をされないのか。一つは、生きている者たちの祈りによって、死者の罪が赦され、その苦しみが和らぐ為。ですから私たちは聖体礼儀において生者と同様に永眠者を記憶し、パニヒダを献じます。時には非常な罪人であっても悔い改めに至ることすらあるそうです。

なにより神様は、この世界以外の別の世界をご用意されていないのです。公審判を経て義人たちが入れられる「天国」は、この世界をすっかり破壊してしまっただけで新たに創られる世界ではありません。復活したイイススの肉体は、施錠された室内に入ることでできる新しい肉体でありながら、同時に十字架上で受けた傷がそのままの、その肉体でした。同様に「天国」は、完全に浄化され、清められ、完成された新しい世界でありながら、同時に「この世界」-太初に神が創造され、幾億の人々が生活を紡いできた「この世界」そのものなのです。「天国」(あるいは「神の国」)の中で「国」と訳されるギリシャ語「バシレイア」は「王の力」「王として支配すること」を意味しており、別の場所という意味ではないのです。「この世界」が「天国」になるのです。なので死者たちは再臨を待っているのです。

神様はひとたびお創りになられたもの-この世界を、一人ひとりの人間を-を深く愛し、決して消滅させることがないのです。神様はこの世界と別の天国はお創りにならない。そして「地獄」もお創りになりません。地獄とは、地獄に入るその人自身によって作られるものです。神様は人間に自由意思を与えたので、人間は神様を拒絶する自由を持っています。地獄とは、神様が人を閉じ込める場所などではなく、神様を拒絶した人間が自分自身を閉じ込めてしまった状態のことです。そして神様は、地獄にいる人間をも愛し続けるのですが、その愛を拒む自由を取り上げることはないのです。地獄を無くすることはないと言えます。